

# 「伝承競技」としての「競漕」の研究

— ハーリーとペーロンを中心として —

瀬戸口 照夫

## I はじめに

本稿は「伝承競技」としての「競漕」の研究の一環である。「伝承競技」とは、われわれが特殊的・一回的出来事として扱ういわゆる史的研究対象とはちがひ、民間の間で毎年同じように繰り返し行なわれ、さほど急激な変化をうけないで世代から世代へ受け継がれてきた競技を意味する。「競技」は辞書的には、互いに技術を競い優劣を争うこと、体力・精神力を競う行動として解されている。そしてその語源を辿れば、国民祭や神祭に行なわれるダンスや競争の意味に使用されたといわれている。したがって、初源的には、祭礼との関わりの中で「競技」は行なわれてきたといえる。

祭りは、基本的には神霊を招き迎えて、それを慰めようとする集团的行事である。集团的行事であるが故に、集団の規模が変化し複雑になれば、その機能も分化し、祭りの役割も多様化する。祭りの機能の多様化こそ、競技がまさに競技として独立する契機となる。このことは現存する「伝承的競漕」にも当てはまることである。しかしながら、集団の拡大、分散による祭りの変質にもかかわらず、「伝承的競漕」が以前として「古態」を保ち「残存」していることも事実である。

競漕は普通、舟による競争、即ちボートレースを意味し、「スポーツ」の概念に内包されるものである。しかし、現代的スポーツ観からでは決して理解できない性格を持つ競技が存在する。その競技のひとつがここで検討する競漕である。中国においては「龍舟競渡」あるいは「競渡」といわれ、沖縄においては「ハーリー」、長崎においては「ペーロン」といわれる競漕である。これらの競漕は単なる競争ではなく、それを成立せしめるおおくの条件がスポーツの枠組の中だけでは到底理解できないものである。したがって、本稿では、文化人類学（民族学・民俗学）的文献資料を主に使用し、その理解においてもそれらの学門的成果を十分に活用した。特に、それらは競漕の名称、起源、龍舟の意味、そしてその目的を考えるうえで必要不可欠なものであった。

## II 本 論

### 1) 名称について

民間伝承としての競漕に対する呼称は多様であり、その源泉を辿ることは容易ではない。わが国における代表的な呼称としては、「フナクラベ」、「布奈久良倍」があった。「競渡ハ、フナクラベト云フ、村上天皇ノ朝ニモ、宮庭ニ於テ既ニ此戯アリ、後世長崎ニ於テ、

五月五日ヲ以テ例トシテ此戲ヲ爲ス、是ヲバイロント云フ、<sup>1)</sup>とある。

今日、伝承されてきている民間の競漕の呼称は、ペーロンとハーリーが代表的である。前者は長崎で行なわれ、後者は沖縄で行なわれているきわめて民俗色豊かな競漕である。また、島根県八束郡美保関町の美保神社の例祭に「諸手船（もろたぶね）」競漕がある。この競漕の漕法が櫓によるものであり、船は「櫓の舳舟（くりぶね）」であるというが、2つの船体をつなぎ合わせる技法で、単なる1本の木を削り貫いて作る方法とは異なっている。<sup>2)</sup>さらに、鹿児島県の奄美大島の競漕は「舟こぎ競争」といわれ、「奄美まつり」の一環として行なわれている。ペーロン、ハーリー、舟こぎ競争の漕法は櫓による「順漕法」である。

長崎におけるペーロンは、あくまで代表的呼称であって、各々の所持地域で異なる場合がある。例えば、キャーロン、カイロン、ピャーロン等と言<sup>3)</sup>い、樺島では「競渡船（きょうとせん）」と呼ばれていた時代があったことが指摘されている。<sup>4)</sup>『長崎市史』によれば、「ペーロンと云ふ唐音は本邦ばかりでなく、支那福州方面にても称へられていたことが明白である。」<sup>5)</sup>と述べている。このペーロンはどんな原語をもっていたのであろうか。「倭訓栞」には「剡龍」とありこれを「ばいろん」と読ませ、唐音であることが記されている。<sup>6)</sup>『長崎聞見録』には「判龍」とありこれも「ばいろん」と読ませている。<sup>7)</sup>さらに、『長崎市史』によれば、「白龍船」、「扒龍船」という文字が南清方面にあったことが指摘されているが、<sup>8)</sup>どういう発音であったかは明示されていない。「白龍船」の存在はChao Wei-Pang が指摘しているところである。<sup>9)</sup>「白」は通常「バァイ（Bai）」と発音する。「龍」は「ロォーン（lóng）」と発音するので「バァイロォーン」あるいは「バイロン」と発音していたのであろう。西村真次は「宋代の書物に『飛龍』という名の舟がある。この飛龍は今日では『フェイ・ラン』と発音するが、それを訛って『ペイロン』だの『バーリー』（爬龍）だのになったことは疑いの余地がなくなった。」<sup>10)</sup>と述べている。『荆楚歳時記』には「舸舟は其の輕利を取る。之を飛鳧と謂う。」<sup>11)</sup>とあり、飛鳧は早く歩くかものことを意味するところから、飛龍は早く走る龍、即ち早く走る龍舟を意味していたのであろう。いずれにしろペーロンの原語を確定はできないが、ペーロンという呼称が存在することは事実である。

一方、沖縄における伝承的競漕は、通常ハーリーと呼ばれている。しかし、糸満漁港で行なわれている競漕は、筆者が訪れた昭和52年には、昔ハーレーと呼ばれていたという理由で、そのようにプログラムにも記され、アナウンスされていた。また、那覇港で行なわれた競漕もヴァーリーと呼ばれていた。これらの原語は「爬龍」であるといわれている。この爬龍は、琉球史研究に欠くことのできない史料といわれる『球陽』に、「龍舟競渡説」の条があり、その一節の「旧記に曰く、昔、久米村・那覇・若狭町・垣花・泉崎・上泊・下泊等の爬竜舟数隻有り。今那覇・久米村・泊村の三隻有りて、四月二十八日より五月初二日に至るまで、唐宋の前江に競渡し、初三日、西の海に浮べ、初四日、那覇港に競

渡すと。<sup>12)</sup>」の記事が原典となっている。この記事によれば、競争をする舟を爬龍舟と言い、競漕それ自体は競渡と称しているかのごとく読みとれる。この記事は、当時の一流の知識人によるものであることは明白であり、そのため実際に民間の人々がどのように理解していたかは確かめられないが、おそらくハーリーという呼称、あるいはそれに近い呼称が存在し、舟と競漕の総称として使用されていたと考える方が自然であろう。

『琉球国由来記』の「爬龍舟の条」から、龍舟による競渡が爬龍舟であることがわかる。<sup>13)</sup>ただこの記事は、中国における起源説を述べ、またその中国名称を記しているのである。したがって、沖縄において競渡あるいは龍舟競渡といていたことを記しているのではない。かといってこの由来記以前に爬龍舟という文字を与えられうる呼称の存在までを否定はできない。上述した通り、ハーリーあるいはそれに近い呼称があったのであろう。

## 2) 起源について

ハーリーやペーロンの起源については、一様に中国における龍舟競渡の起源説が採用されている。しかし、沖縄や長崎に独自の競漕がなかったということが確立していない今日、中国における起源説を絶対的なものとして採用することには慎重でなければならない。しかしながら、競漕の方法やそれらを取り巻く諸々の行事が中国のそれと類似する以上無視するわけにはいかない。

最も代表的な起源説は、「屈原」の自殺を憐れ悲しんだ人々が、その霊を慰さめるために競漕するようになったという説である。屈原は、戦国時代の楚の政治家として活躍した歴史的な人物であり、後に江南（湖南省）に流され、楚の滅亡と共に、汨羅の川に身を投じて国に殉じたといわれている。また彼は詩人でもあり、その作品は『楚辞』に収められている。この屈原の慰霊説を伝えた古い史料として『酃陽記』<sup>14)</sup>が指摘されている。「煨蛟水、一名は孝経潭。県南二百歩に存り。江中流石の際に潭あり。往々、蛟ありて浮び出で、時に人を傷つく。五月五日に至るごとに郷人この江水に於いて船を以て競渡す。俗に云う。屈原のために災を禳うと。」<sup>15)</sup>『荆楚歳時記』には「按ずるに、五月五日、競渡あり。俗に屈原が汨羅に投ずる日、其の死所を傷むが為なり。故に並びに舟楫を命じて以て之を極う。」<sup>16)</sup>とある。さらに、『隋書』地理志には、「屈原、五月望日を以て汨羅に赴く、土人追いて洞庭に至るも見えず。湖は大にして舩は小、済るを得る者なし。乃ち歌いて曰く、何に由ってか湖を渡るを得んと。爾れに困って櫂を鼓し争い帰り、競いて亭上に会す。習いて以て相い伝え、競渡の戯を為す。」<sup>17)</sup>とある。競渡起源に関する論議の中では必ずといってよいほど引合に出される屈原の入水自殺は、後述するが、われわれに重要な手がかりを残している。

次に、伍子胥慰霊説がある。伍子胥は春秋時代の楚の平王に仕えたおそらく歴史的な人物であろうといわれている。『荆楚歳時記』には、「五月五日、時に伍君を迎う。濤に逆いて上り、水の淹う所と為ると。斯れ又た東呉の俗にして、事は子胥に存り、屈平に關せざ

るなり。」<sup>18)</sup>とある。伍子胥は楚の平王に父と兄を殺されたので呉に走り、楚を討って平王の墓をあばき、復讐の念をはらした。その後、越を攻めるのに功があったが、呉王夫差が中傷の言を信じて自決を命じられた。彼は呉国の前途を呪いつつ自殺した。夫差は怒ってその屍を革袋に入れて長江に投じた。呉の人々は彼を憐れんでこれを祠ったという。<sup>19)</sup>

Eberhard は『The local cultures of south and east china』において、伍子胥は剣で自殺し、その死体は首を切り取られ目はくりぬかれ、残りは鰓魚という特殊な袋に包まれて川へ投げ込まれたことに留意し、そしてまた、伍子胥がまつられている寺院のあることを1つの論拠として、彼は川の神であり、五月五日の祭礼は彼のものであることを指摘している。<sup>20)</sup>

次に、曹娥<sup>もうが</sup>説が上げられる。黒岩義嗣氏は『東漢烈女傳』を概略し、この説を指摘している。<sup>21)</sup>即ち、曹娥は孝女の評判の高い娘で、その父は巫祝<sup>ふしこく</sup>であり、五月五日の端午節に舟を揚子江に浮べ、儀式中に誤って江に落ち溺死した。しかし、その死体が発見されず、娘の曹娥は14才であったが、父の死体を捜し求めて江を歩き回った。しかし発見できず、悲嘆のあまり江中に投身自殺した。その五日後に父の死体を背負うた曹娥が発見され、人々は少女の志を憐れみ江辺にその霊を祀り小祠を建て奉ったのである。<sup>22)</sup>

Eberhard は、この曹娥の自殺を指摘し、その死体が川に漂いのちに礼拝を受けたことに留意し、タイ文化、越文化との関係を論じている。<sup>23)</sup>

これらの起源説で共通する点は、彼らが決して尋常な死に方ではなく、いわば非業の死を遂げたところにある。それが自殺という型をとっているところに興味が湧く。ハーリーやペーロンの起源を中国に求めようとするとき、必ずといってよいほど指摘されるのが上述の非業の死に対する人々の礼拝である。この自殺に対する礼拝と沖縄や長崎の競漕との間にどのような関係があるのだろうか。

沖縄におけるハーリーの起源を考えると、沖縄独特のものはないのであろうかという発問に答えねばならない。与那国久部良の海神祭(ウンジャミ)に競漕が行なわれる。これは旧暦5月3・4日に行なわれ、舟には波型・太陽・月・星が描かれ、沖から岸へレースが行なわれる。<sup>24)</sup>この点に関して、国分直一氏は、「海の彼方から子孫の世界を訪ねる祖霊を迎える儀礼的なレセプションとしての意義をもつ」<sup>25)</sup>ことを指摘している。そしてこのハーリーは3回行なわれ、そのうち1回は舟を転覆させ、乗組員はそれを起こして再び競争する。これは上述した中国における自殺との関係を連想させるが後述する。翌日出航する船は旗をかかげるが、これは祖霊を海の彼方に送ることを意味するという。<sup>26)</sup>

糸満でのハーリーは岸から沖へ行なわれる。特に白銀堂との関係を国分氏は強調している。レースは、白銀堂の位置を決勝線あるいは折り返し線として行なわれる。これは葬所に死霊を送る、即ち、白銀堂へ死霊を送るために岸から沖(決勝線)へ競漕するのであるという。<sup>27)</sup>

長崎においても興味深い事例が報告されている。西彼杵半島の福田地方では、旧5月5

日に「カイロン龍宮祭」(潮祭ともいう)<sup>28)</sup>が行なわれていた。早朝、朝日が出る前に終了しようとするもので、海龍船(福田あたりではペーロンをカイロンと呼んでいたそうで、この漢字があてられたのであろう。)にて所定の場所へ行って、「朝廻り祭事」が行なわれる。「龍宮祭の海龍船は、カジカケの瀬の上で舟あしをとどめて、漕手は漕ぐ手を止め、鑼手も鼓手も船上楽器の鳴物の音をおさえて静まる。飽くまでも冷んやりとして、ひそまりかへったその昏い海上のひとつき、神さびた神官の祝詞が昔は厳かに称えられた。祈禱が終れば、再び朝廻り特有の拍子を併せて舟をすすめ、巡拝神社のもとにいたり、船上から遙拝して祈る。」<sup>29)</sup>これはおそらく安全祈願の祭事であると思われる。即ち、カジカケの瀬ではよく遭難が起っていたといわれているからである。また、この祭事が端午節と結びついたのも興味のつきぬところである。

沖縄の海神祭にしろ、長崎の龍宮祭にしろそれぞれの所持地域の特色を保持しているといえよう。

### 3) 競漕と龍

競漕と龍が何故に結合したのか。龍はいかなる意味をもつのか。といった疑問が当然生じてくる。本稿の主要テーマが「龍舟」による競漕に深くかかわることは前述した通りである。「龍舟」とはどのような概念規定ができるであろうか。『大漢和辞典』<sup>30)</sup>によれば、大船。龍を書いた舟。天子の船。端午節に競漕する舟。龍の形を飾りとしたもの。等の意味がある。また、「龍船」「龍舸」も龍舟と同じ意味がある。さらに、「龍頭鷁首(りゅうとうげきしゅ)」という言葉がある。これは、大きな舟。龍の形状を舟に刻し、船の舳に鷁という大鳥を書いたり、付けたりした舟を意味する。「鷁」は、形は鷺に似て大きく、羽は蒼白色で、よく風に耐えるというので船にその形を付けたり書いたりされるという。<sup>31)</sup>この「鷁」を船首に持つふねを、「鷁舟」や「鷁首」あるいは「鷁舵」という。「龍頭」はこの場合「龍頭を刻したり、付けたりした船」で龍舟を意味するといえよう。

「龍」は想像上の動物とされ、様々な意味が付与され、色々な説話が存在する。われわれ人間が観察できるものでもないことは知っているにもかかわらず、うやまうべき存在として観念されてきたことは異論のないところである。その論拠として、われわれは「龍神信仰」を引合いに出すことができる。「龍神」という神観念は、超自然的な存在としての龍の力にたよらざるをえない状況下で作り出された、民間の想像神である。これは、水田耕作を主な生業形態とする地域において、必要不可欠な水との関わりの中で信仰されてきたものである。したがって、龍は水神、雨神として信仰され、農耕との関わりを強調される。<sup>32)</sup>また一方では、漁業生産との関わりも指摘されていることは周知のところである。

ところで、何故競漕と龍が結びついたのか、あるいは「結合」という表現が不適当で、最初から龍舟競漕であったのか、これを解く糸口を見つけるため、われわれはまず最初に、龍とかかわりのない競漕を挙げることができる。黒岩義嗣氏は、「南方独木舟競渡」と称

し、龍舟競漕の原型を為すと仮定している。また、氏は競漕がインド、ビルマ、マレー、ミクロネシア、ニュージーランド、アフリカ等で行なわれていることを指摘している。<sup>33)</sup>特に興味深いのは、ニュージーランドのマオリ族がロトルア湖岸で行う「花嫁狩ボイ競漕」である。これは、マオリ族の多くの娘たちの中から選び出された美しい娘を小さな船脚の早い独木舟（ボイ）の舳に乗せ、合図と共に出発し、青年たちの乗った船が追いつき、その娘を自らの舟に設けた空席に移し座らせ、決勝点へ到着したものを勝者と決定する。また、アフリカにも同様のものが存在することを指摘している。<sup>34)</sup>

この競漕は明らかに龍舟とは無関係である。もし、黒岩氏が主張するように、龍舟競漕の原型としてこのような独木舟競漕が中国大陆に伝播したものであるなら、その時点で「龍」と結合したことになり、龍舟が製作されるようになったと思われる。あるいは龍舟自体は大陸に存在し、漕法だけが伝播したことになる。しかし、下述のような競漕の存在によって、この競漕の伝播説は薄らいだように思える。

ボルネオ島のサンダカンでは、正月に独木舟による競漕がある。これは、他の地域の漕法が座位であるのに対し、「立漕法」で行なわれる。これを黒岩氏は「斯うした特異な漕法の成因は、どこまでも競渡艇としての速力要求から来るものである。」<sup>35)</sup>と述べている。したがって、「立漕法」からくる当然の結果として船体の構造の違いが指摘できよう。さらに、この「立漕法」とビルマの「筏舟競漕」における立漕法との関係を氏は「座って漕ぐ独木舟漕法に、立って漕ぐところの漕法を教えたのは、筏舟特有の漕法ではあるまいかと思われる。即ち、ビルマあたりの影興がサンダカンへ及ぼしたとも見られる。」<sup>36)</sup>と述べ南下説も指摘しているところである。確かに船舶発達史的に見ても、筏・くり舟・構造船というように発展し、その漕法も立位から座位へ移行したと見るのが自然であろう。が、ビルマの影響をうけたかどうかを決定するには論拠に乏しい。このサンダカンの独木舟の舟首には、何んの装飾もないが、舟尾には、蛇の尾を思わせるように高くなり、「海蛇の鱗や鰐魚の皮膚の模様」<sup>37)</sup>を装飾しているという。したがって、まったく龍との関係を否定できなくなった。

競漕と龍との結合を知るために、われわれは次のような資料を引合いに出すことができる。即ち、「豪雨は二つの竜の戦いと観ぜられ、あるいは青い竜と白い虎とが相接して戦えば雨期となり、両者が相離れると乾期になる、などとされています。二つの竜、またはそれに該当するものの戦いを人間が演ずることにより、雨をもたらし得るという考えが爬竜船やこれに関連ある行事の根柢にあるのかも知れません。」<sup>38)</sup>である。さらに、「ラオス出身のブントンという若い研究者によれば、春には雨期になって田植が始まるのであるが、その時期にはメコン河の竜が眼にみえない姿で水田にはいつてきて稲作を豊かにし、秋の乾期になると竜は再びメコン河に帰るので、竜の形の船を漕いでこれをおくる。」<sup>39)</sup>があげられる。この2つの意味するところは、競漕と龍と雨と稲の豊作との関係を述べているのである。これらに関しては次項で述べることにする。

#### 4) 競漕の目的

競漕の目的は大まかにいって次の3項にまとめることができるようである。第一に人身供犠として。第二に送霊の目的。第三に降雨儀礼として。以上のような目的で競漕は行なわれているといつてよい。

最初に、人身供犠として競漕が行なわれたことを主張するのはEberhard である。彼は『Chinese Festival』で、競漕は神裁の一種であり、起源説で登場する屈原の入水自殺も、犠牲の一人であったことを述べている。即ち、屈原の先祖はタイ族に属し、彼等は谷や湖や川の近くの平野を選び、灌漑施設を作り水田を作った。そして、彼等は稲にかかわる祭をいくつか持っていた。稲の豊作が彼等の最大の関心事であり、そのために稲の成長をうながす方法として、人身供犠がおこなわれたという。この人身供犠は、最初は首狩の方法をとっていたという。タイ族以外の特に「南中国」の植民者や旅行中の学者が捕虜となり、彼等は、祭礼の日まで十分にもてなされ、祭礼の当日犠牲にされた。犠牲にされた人の体はバラバラに切られ、人々に分配された。タイ族は分配されたものをそれぞれの耕地に埋葬するが、その頭部を得たものが最も幸運な人であるとされていた。文明の発展と共にこの「首狩」が実践不可能になり、神裁の他の型態が登場する。ひとつは2つの集団間で行なわれる「石合戦」であり、これは唯かが死ぬことで終了する。もうひとつは2つの集団が川の両岸に立ち、「川を歩いて渡る」ことを競い、死者が出ることで終了する。いづれにしる犠牲の確得方法であり、これらの代用として競漕が始まったという<sup>40)</sup>。したがって、死者を確得するためにわざわざ転覆させ犠牲を得ていたという<sup>41)</sup>。以上がEberhardの人身供犠を目的としての競漕の論旨である。したがって、屈原に限らず非業の死を遂げた人々が競漕の起源説に引合いに出されるのは理解し得る。そしてまた、われわれは次のような人身供儀の記事を提供することができる。

『史記』の「滑稽列伝」によれば、魏時代の鄴（河南省安陽県）では、毎年河伯（黄河の神）に美しい娘を嫁として提供する慣習があった。河伯の嫁として選ぶのは巫祝であり、家々をまわり、美しい娘を捜し出し、十日あまり斎戒させ、十分な食事を与えその日を持つのである。当日娘は嫁入りするときの床席に座らされ、そのまま河に浮べられるのである。このような慣習は「河伯に嫁をやらねば、水があふれて家々を沈め、町の人々を溺れ死にさせる」という民間の俗信によるという<sup>42)</sup>。これは人身供儀の異った型態として理解できるし、この俗信は犠牲を与えることによって洪水を回避させる、いわゆる減水儀礼の性格をもつものといえる。このような俗信は、自然的地理的環境の産物であり、信仰の性格も環境の違いによって、正反対の意味を付与される場合がある。即ちそれは、降雨を願う雨乞の儀式がそれである。この降雨と減水が要求されるのは、主に水稻栽培においてであろう。水を必要とする時期と不必要な時期は稲作においては必ず通過する時期である。したがって、降雨と減水は水稻栽培という過程において一直線上にあるものである。

次にわれわれは、送霊の目的で競漕が行なわれることに言及したい。これを主張してい

るのは、Cha Wei-pang であり、彼は楊嗣昌の「武陵競渡略」を英訳した「The dragon boat race in Wu-ling, Hunan」の補注に次のような解釈をしている。即ち、「競渡」の目的は「送標」(to send away the mark) であると思うが、なぜそう呼ばれるかは不明である。それは悪霊を追い払うための儀式であり、競漕は多くの資料の中で、悪霊払いのために実施されることが言及されている。龍舟は一般に、悪霊を遠くへ送るものとして考えられている。岳州においては、家族の誰かが病気の家は、岸辺に供物を置き、龍舟の乗組員のために食物と酒を準備し、藁で浮く舟を作る。湖南の衡山においては、「龍舟競渡祭」に祭司と巫祝は、紙の龍舟を作り、それを二人で、太鼓やドラがかけられている木製の台の上に置く。人々はその木製の台を戸口か戸口へ歌を歌いながら歩きまわる。これは災厄を阻止するために行なわれると言われている。攸県においては、木製の龍舟が作られ、その上にはオールを持った紙人形が立っている。そして、その舟は通りを運ばれる。長沙においては、人が病気のときは舟が巫祝の指示で作られる。<sup>43)</sup>

以上のように、彼は、悪霊払いの目的で競漕や龍舟祭が行なわれることを指摘している。さらに、楊嗣昌は同論文で、「今日競漕は災難を回避させるために行なわれる。競漕が終わった後に、舟は犠牲の動物や酒や紙幣を下流に運ぶ。下流では動物や酒は水中に投げられ、紙幣は燃やされ呪文がとなえられる。その結果、疫病や早死が水と共に流れ去るであろう。これが送標と呼ばれる。<sup>44)</sup>」と述べ、さらに、「乗組員が、桃符や兵罐を水に投ずるのは、勝利を祈るためではない。悪魔を殺すことのできる桃符は、悪霊を回避させるためのしである。<sup>45)</sup>」という。

また、楊嗣昌は、「競漕は、災難を回避させるために行なわれるだけでなく、その年の収穫を予言するためにも行なわれる。『もし花船が勝つなら、良い農作物が収穫されるであろう。』儲光義の詩には『競漕は、秋のよい農作物を予祝することができる。』とある。それ故に、この伝承は非常に古く、たぶん豊作の年に競漕が熱狂的に行なわれたことを意味する。<sup>46)</sup>」と、予祝儀礼として競漕が行なわれたことを指摘している。この予祝儀礼とのかかわりを沖縄のハーリーに求めることができる。「ハーリーがいわゆる『ゆがふう』(豊饒)を祈る行事であることは、ハーリーの歌に『ゆがふ待ち受けて走る美しさよ』という意味のことばが謡いこまれていることと、このハーリー行事のクライマックスである『アガイバーリー』がはるか沖あいより陸めがけて漕で来る競漕である。<sup>47)</sup>」ところから、年占的儀礼として理解できる。このように、農耕儀礼的性格を保有しながら伝承されてきている場合もある。

次に農耕儀礼との関係を明確にし得る目的がある。それは、「雨乞」を目的とした競漕である。小松原濤(黒岩義嗣氏のペンネーム)は『天草ペーロン志』で天草の富岡で雨乞ペーロンが実施されたことを指摘している。即ち、「明治三年七月十七日」の「雨乞競渡船入用」の記事である。<sup>48)</sup>さらに、新町においても雨乞ペーロンが明治26年に行なわれたことが記事として残されている。<sup>49)</sup>富岡の雨乞ペーロンは、「ペーロン船に神官と僧侶とが乗



り、ヤタガソネに向う。このヤタガソネは飛竜権現から巴崎寄りの海底にある。海深は六呎から八呎である。ここに竜神が棲むという民間信仰により『八大竜王』と書いて、神饌を供える。<sup>50)</sup>そして、「請雨経が終って、本段儀礼にうつり、ペーロン競渡が始まるのである。<sup>51)</sup>」ここでも、雨神としての龍が観念されていることがわかる。したがって、農耕儀礼と龍とのかかわりは明確になったといえる。

また氏は、同著で東南アジア一帯に雨乞競漕が分布することを指摘し、それは「農民層にひろがっている農業祭儀であるが、海辺水辺居住の半農半魚の民衆を主体とする常団的な対抗部落競技であり、競渡民はその行事を営むにあたってその祈願の方途として宗教的な司祭を招致し、請雨の呪術を依頼するのである。<sup>52)</sup>」と述べている。

『荆楚歳時記』の補注においても、「競渡はたがいに競いて雨を呼び、水を起こす龍の形を象ったものかも知れない。また、いま一つの考え方としては競渡における賑かな歓呼の声在水中の龍を驚かせ、ひいては雨を招くと信じられたのかも知れない。<sup>53)</sup>」とある。

以上のように、農耕儀礼の概念に内包される「雨乞」を目的とした競漕が、東南アジアで実施され現存することは、ハーリーやペーロンの起源を考えるうえで非常に有益である。

### Ⅲ おわりに

以上述べてきた競漕は、端午節とよく結びつけられ論じられている。今日、端午節は5月5日となっているが、もともと「端午」というのは「月の初めの午の日というのが原義」<sup>54)</sup>である。したがって5月5日に限ったことではないことになる。それはともかくとして、5月5日の端午の日には競漕以外にもさまざまな慣習がある。菖蒲の魔除け、病氣追放のための艾、そして粽等がそれである。粽に関しては屈原の故事と結びつけられている。屈原の入水自殺に対し、人々はその死を憐れみ供物として米を投じた。それは供物を得られない魂は飢餓の悩みを受けるという理由からである。しかし、屈原の魂が漁師の前に現われ、巨大な龍が供物として提供された米を横どりし、今では飢餓の状態にあるということを告げた。そこで人々は絹布で米を包み、5色の絹糸でその包みをしばった。これが現存する粽の由来であるという。<sup>55)</sup>

競漕と5月5日の端午節とが結びついている場合が多いが、しかし、東南アジアのいたるところで、そして、わが国において5月5日以外の日で開催される場合もある。このことはすでに述べたように水稻栽培との関係から当然あり得ることである。むしろ、5月5日の端午節に行なわれる競漕ほど屈原の故事に習った感がしないでもない。

ほとんどの民間の祭礼が、季節の折目折目に行なわれることからすれば、そして、農耕、特に稲作との関係をもつ行事であることからすれば、地理的自然的環境の違いによって、農作業のリズムも違うはずである。したがって、競漕の開催日が異なるのは自然である。

ただ同じような環境において、開催日が異なるのはどのような理由によるものであろうか。次の3点が考えられる。1つは、中国の競渡がそのままそっくり導入された場合。1

つは、本来季節の折目折目に行なわれる民間の祭事に競漕が導入された場合。1つは、まったく独自のものとして民間の間に存在していた場合。以上の3つによって開催日が違うものと思われる。

今まで、競漕の名称や意味、そしてそれにまつわる信仰的なもの、また農耕との関係などを述べてきたが、今後の課題としては、各々の地域の競漕の差異を明らかにし、その変遷の跡をたどってみたい。そしてまた、照葉樹林文化圏との関係を検討してみたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 古事類苑刊行会：『古事類苑 遊戯部』昭和2年 p.1187.
- 2) 「最後の諸手船づくり」 朝日新聞 昭和55年5月29日.
- 3) 黒岩義嗣：「ペーロン大系 35」 長崎日日新聞 昭和4年6月21日.
- 4) 3) の「ペーロン大系 10」 昭和4年5月21日.
- 5) 長崎市役所：『長崎市史 風俗編』 大正14年 pp.278~279.
- 6) 1) の p.1188.
- 7) 1) の p.1191.
- 8) 5) の p.280.
- 9) Chao Wei-Pang : 「The Dragon Boat Race in Wu-ling, Hunan.」 『Folklore Studies Vol. II』 1943年 p.15.
- 10) 西村真次：「先史時代及び原史時代の水上運搬具」 『日本民俗文化大系 10』 講談社 昭和53年 p.334.
- 11) 宗懐 守屋美都雄訳注布目潮楓他補訂：『荆楚歳時記』 平凡社 昭和53年 p.149.
- 12) 球陽研究会：『球陽 読み下し編』 角川書店 昭和49年 p.110.
- 13) 伊波普猷他編：「琉球国由来記 9」 『唐栄古記全集』 昭和15年 p.184.
- 14) 11) の p.150.
- 15) 同上の訳.
- 16) 11) の p.149.
- 17) 同上の訳.
- 18) 11) の p.149.
- 19) 11) の p.157.
- 20) Wolfram Eberhard : 『The Local Cultures of South and East China』 E. J. Brill, Leiden, Netherlands 1968年 pp.390~391.
- 21) 3) の「ペーロン大系 21」 昭和4年6月2日.
- 22) 同上.
- 23) 20) の pp.393~394.
- 24) 国分直一：『日本民族文化の研究』 慶友社 昭和47年 p.375.
- 25) 同上.
- 26) 同上.
- 27) 24) の p.376, p.401.
- 28) 3) の「ペーロン大系 37」 昭和4年6月25日.
- 29) 同上.
- 30) 諸橋轍次：『大漢和辞典』 大修館書店.
- 31) 同上.
- 32) 大塚民俗学会：『日本民俗事典』 弘文堂 昭和47年 p.795.

- 33) 3) の「ペーロン大系 24」 昭和4年6月7日.
- 34) 3) の「ペーロン大系 25」 昭和4年6月8日.
- 35) 3) の「ペーロン大系 28」 昭和4年6月12日.
- 36) 同上.
- 37) 同上.
- 38) 馬淵東一：「爬竜船について」『沖縄文化 16』 昭和39年 p.291.
- 39) 38) の p.292.
- 40) Wolfran Eberhard: 「The dragon-boat festival」『Chinese Festival』 New Yark 1952年 pp. 74~77.
- 41) 40) の p.73.
- 42) 野口定男訳：『史記』 平凡社 昭和34年 p.446.
- 43) 9) の p.10.
- 44) 9) の pp. 9 ~10.
- 45) 9) の p.11.
- 46) 9) の pp.11~12.
- 47) 沖縄県：『沖縄県史 23巻』 民俗2 巖南堂書店 1975年 p.22.
- 48) 小松原濤：『天草ペーロン志』 天草民報社 昭和31年 p.52.
- 49) 48) の p.76.
- 50) 48) の p.51.
- 51) 同上.
- 52) 同上.
- 53) 11) の p.153.
- 54) 11) の p.147.
- 55) 40) の p.74.